今月の一品 令和 5(2023)年 10 月

飯能市立博物館 Hanno Municipal Museum

神々を図像化した掛け軸

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

本資料は飯能市域で収集した資料ではありませんが、寺院で収集されたものを、護符など信仰に関係する資料を理解するために、ご寄贈いただいたものです。図像化された神々を知るうえで良い資料です。

8 柱の神々が描かれていますが、一番上におり「大日霊貴神」と神名が書かれているのは日本神話の最高神で女神の天照大神です。両手で太陽を象徴する丸い鏡と思しきものを抱え持ち、太陽神であることを示しています。「須佐之男尊」は天照大神の弟神。荒ぶる神・英雄神らしく眼光が鋭く、髪型がなんだかゴツゴツしています。「大山祇神」は山々の精霊を総轄支配する神です。矛を持ち太刀をはき威風堂々としています。「大国主神」は別名大穴牟遅神ともいい出雲神話の主役です。「出雲国風土記」に天の下造らしし大神とあり、古代の出雲地方では創造神として信仰されていたと考えられています。描かれているのは室町時代に大黒天と習合(同じ神仏としてみなすこと)して以来の姿です。右手に玉を持ち、微かに笑みを浮かべているように見え、大黒天の持つ福の神としての側面が表現されています。「八意思兼神」は、天照大神が弟神である須佐之男尊による非礼に激怒、天岩戸に籠った際に、八百万の神々の中心となって対策を練った智慧の神、思慮分別の神です。右手に尺を持ち、その冷静な眼差しは、遠くまで見据えるようです。「保食神」は食物神。月読尊に殺され、その死体から牛馬・粟・蚕・稗・稲・麦・大豆・小豆を生み出しました。女神の姿のように見えます。「八幡神」は、奈良の大仏鋳造を授けようと託宣したことにより、天応元(781)年、朝廷から大菩薩号を贈られ、神仏習合の先駆となった神です。清和源氏の氏神となり武人に厚く信仰されたことから、太刀をはき弓矢を携え、武神としての性格を強く表現されています。「木花開耶姫神」は大山祇神の娘で皇孫瓊瓊杵尊の妃神です。容色婉美にして、霊峰富士の大神としても祀られています。十二単姿の美しい姫神として描かれています。皆、神名と共に干支が書いてあります。その干支の守り神ということでしょう。

画像１　8 柱の神々

掛け軸には「羽黒山麓　神林栄仙」とあります。掛け軸は墨摺りに見られる滲みなどが見られず、印刷の可能性が高い為、おそらく明治時代以降のものと思われます。「羽黒山麓」(羽黒山は山岳信仰の霊地として知られる出羽三山の一つ)で明治以降、登山口として栄えたのは、手向(現山形県鶴岡市羽黒町手向)です。神林栄仙は、明治時代以降に信者の宿泊など世話をしつつ、掛け軸や護符などを配り、出羽三山への信仰に関わる宗教活動をした、手向の宿坊にいた人物なのかもしれません。

【引用・参考文献など】

安津素彦・梅田義彦 編集・監修『神道辞典』堀書店 昭和43(1968)年
戸川安章 編著『出羽三山と東北修験の研究』名著出版 昭和50(1975)年